

氏名	森田 早織
ヨミガナ	モリタ サオリ
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第452号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 青蓮院所蔵国宝「不動明王二童子像」の表現技法に関する研究 —造形表現と技法材料の関連性について— 〈作品〉 青蓮院所蔵「不動明王二童子像」の想定復元模写

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	荒井 経
（論文第1副査）	東京藝術大学	客員教授	（美術学部）	有賀 祥隆
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	宮廻 正明
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藪内 佐斗司
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師		染谷 香理

（論文内容の要旨）

京都・青蓮院所蔵国宝「不動明王二童子像」は、天台の安然（841～915?）が創出した観想法「不動十九相観」を忠実に造形化した最古の彩色画像であると示唆される。また絵画様式においても、流麗な線描や鮮やかな彩色技法が用いられ、賦彩を中心とした平安仏教絵画の中でも秀逸とされる。本研究では、「不動十九相観」の経軌に基づいた初期彩色画像である点に着目し、青蓮院本の作意工程と当初の視覚効果について、実技的知見から検証を行う事を目的とした。

不動明王は、平安時代9世紀はじめに空海らによって唐から日本へ図像が請来され、現在までにも多くの人々に親しまれ根強く信仰されてきた。尊像は彫刻や平面画としても盛んに造像され、今日においても数多く現存している。その中でも三大不動画の一つとして、園城寺の「金色不動明王像」（通称、黄不動）、高野山明王院の「不動明王二童子像」（通称、赤不動）と共に取り上げられるのが、本研究の対象作品となる青蓮院本（通称、青不動）である。

先学によれば、青蓮院本の像容や身色、その他細部の造形に亘っては、観想法「不動十九相観」や不動法に忠実に従い造形化されていると示唆される。密教における観相とは、諸修法の根幹をなす最も重要な修行法であり、その中で本尊画は礼拝の対象であると同時に、観者（修行者）の導き手としての役割を担う重要な要素である。この事から青蓮院本の制作においては、制作者側が図像や教典、修法に深く精通している可能性が指摘されている。

一方、青蓮院本に用いられた絵画様式においては、その流麗な線描や賦彩を中心とした鮮やかな彩色による表現技法が用いられている。このような表現様式は、12世紀後期院政期仏教絵画のような工芸的な表現様式に至る以前の、11世紀仏教絵画に見られる。また、迦楼羅（かるら）を模しながらも焰の自然な表情をとらえた火焰光背や、複雑な装身具など、青蓮院本における個々のモチーフは他に類を見ない表現であり、その造形力と技法は秀逸であるといえよう。以上の点から筆者は、教典や修法に精通した制作者側が改な図像を制作するにあたり、図様及び造形部分のみを経軌に従っただけでなく、技法や表現においても宗教的な視覚効果を考慮したと考えた。

しかし、現在本図は経年による色料の変色や過去の修理による裏箔・裏彩色の欠失などにより、描かれた当初の尊容表現から変化している部分も少なくない。また本図は所蔵者である青蓮院門跡に伝承され厳重に保管されてきた為、科学分析調査や詳しい技法材料、制作工程に関する詳細な調査研究は多く行われていない。その為、使用された材料や技法、制作工程など要所要所に不明な点が残されている。特に、最も重要で

ある本尊肉身部分の色調と裏箔部分は、当初の姿から大きく変化している為、青蓮院本に用いられた材料及び技法を推定し、実技検証にて解明を行う必要があると考えた。

そこで本研究では、青蓮院本の造形表現における様式及び技法的な特徴を明らかにする為に、本図に用いられた技法解明をとおして当初の像容の想定復元模写を試みた。青蓮院本における造形表現に関する先行研究を踏まえ、過去の調査で残された高精細画像や科学的画像資料から、材料と技法手順を推測した。また、熟覧調査で得た色調及び色料の質感や、高精細カメラ撮影で得た顔料粒子及び基底材の織組成画像などを基に、青蓮院本に用いられた材料と表現技法について実技検証を行った。また、本図は厳重に保管されていた事により保存状態は比較的良好であり、同時代周辺の作品ではほとんど残っていない絵絹の継ぎ糸や色料等が現在でも観察する事ができた。このような要素は、当時の材料準備や制作工程部分を考察するにあたり有効な情報である。以上の考察を基に、在来技術を用いた基底材の製作をはじめとし、絹の縫合方法や制作工程、彩色構造の技法検証を行った。

結果、調査及び実技検証を行う事で青蓮院本に用いられた材料の質を把握すると共に、表現技法と材料の関連性が明らかとなった。青蓮院本に用いられた材料は上質であり、基底材は均整のとれた繊細な絵絹で、色料は不純物が少なく精製されている事が確認された。本尊の肉身に使われている群青の色調や、火焰光背の色料、裏箔と彩色の合わせ構造などは、各色料の性質を十分理解して光を効果的に反映する配置であると考えられた。また想定復元模写制作し提示する事で、これまで不明瞭であった緻密で華やかな装飾や文様を復元する事が出来た。この事から、観想像としてイメージを導き出す工夫が凝らされ、また礼拝画像として迫力と荘厳性の高い本尊である事が明らかとなった。以上のように実技的見地から検証することで、青蓮院本が不動「十九観」の儀軌に従えた造形であるという見解に加えて、観想としての視覚効果をも考慮した表現技法であることか明らかとなり、青蓮院本の表現技法における特異性として提示できると考えられる。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、平安時代中期(11世紀)に制作された京都・青蓮院所蔵の国宝「不動明王二童子像」(以下本図)について、熟覧および高精細画像、赤外線・X線透過撮影による画像資料から基底素材の絵絹や色料および表現技法を考察、推定し、これを明らかにするために仮説を立て、実技検証を行うことともに想定復元模写を行い、目に見える形で示した過程を詳しく論述したものである。

本論文は、序論・研究概要、第1章・青蓮院所蔵「不動明王二童子像」の美術史的背景、第2章・事前調査及び表現技法の考察、第3章・実技検証及び想定復元、第4章・所見、総括、で構成されている。特に絵絹については、筆あたりが滑めらかで、線のアウトラインが美しく、はっきり出せる古代製法による平目糸で織した絵絹を選定し、このことによって表から描いた線描が裏彩色で埋没することなく、本図のようにはじめて行った骨描きが彩色後も活かせる技法に適した絵絹であることを確認し、また絹継ぎについては「縫い目」が斜め目になっていることから「かがり縫い」(内表)とする。彩色技法では仮説を立て、中でも背景色は解釈がむつかしく、画面の上辺部・中間部(虚空)と下辺部(地面)が一様でなく、上辺部は素絹状態であるが、全体に大き目の青い粒子の付着がみられ、中間部は赤色色料の塊が所々に付着しているが、朱だけでは赤味が強い為、ベースに藍を塗布し、上から朱を重ね、下辺部は黄ばみ、表に赤茶色の色料が付着し、裏からも同系色がみられるため焼成した黄口黄土に黄口朱と朱柄で色調を調整して裏表から施す。また、火焰光背は墨線による下書き線がみられず、朱で輪郭線を取り、そのあと裏表から鉛白、朱、丹具で彩色を施す。

以上のごとく、本論文は本図と最寄りの絵絹の選定から彩色技法を解明すべく背景色・火焰光背はもとより不動二童子の肉身、就中、不動明王の群青の裏彩色による表現や着衣についても逐一、考察・推定し仮説を立て、それを実技検証することによって想定復元模写を完成する過程を論述するが、その論旨は明快で十分に評価される。

(作品審査結果の要旨)

本研究で取り上げた京都青蓮院所蔵国宝「不動明王二童子像」は、天台密教僧安然が創出した「不動十九相観」の教軌に忠実に基づき制作された、平安仏教絵画の最高峰の作品である。本尊である青不動の表現や複雑な装身具の描写、迦楼羅を描きながらも自然に燃え上がる火焰後背等は他に類を見ない優れた造形力を持っている。

そこで本研究は、教軌と造形表現の関連性に着目し、描かれた当初を想定する復元模写を行った。赤外線画像やX線透過撮影画像等、科学的資料や先行研究を参考に、原本から受ける作家の感動をベースに、工夫し卓越した技法や洗練された材料を研究し、描かれた当時の再現につとめ、飛躍的に成果を上げていった。制作過程で本図の白描の状態を経験することができた事や、これだけの大幅の制作に携われた事は貴重な経験にもなった。

今回の最大の成果は、群青や朱をただ単に塗るのではなく、平安時代に限りなく近いと思われる彩色法を会得できた事である。今まで再現模写があまり高い評価を受けてこなかった点を覆す第一歩になった。この作品は裏彩色もうまく取り入れられており、裏からの彩色を丁寧に注意深く施し、画面の強弱のバランスをうまく表現している。厳しさの中にもゆったりとしたふくよかさを感じる表現は卓越している。特に本尊と火焰の位置関係を作品の中から巧みに読み取り表現している点は、作家としての高い資質を感じる。また背景の色についても可能な限りの考察を加え決定した色味は、今後の一つの提言のきっかけになるものと思われる。これらを含め、過去の復元模写に於いて誰も到達出来なかった技術と感受性が融合した秀逸な復元模写に仕上がった。教軌に基づいて描いているという本研究の導入点から、密教の本質にも迫る説得力のある作品に仕上がっていったのは、本研究の何物にも代え難い大きな成果である。

今回論文のテーマに沿って復元模写を行い、明確に描かれた当初の姿を実証する作品を作り上げていった事は、模写と研究と制作がうまく融合していった証として高く評価される。この作品の年代設定の分野でも大きな役割を果たすことが多いに期待できる。

(総合審査結果の要旨)

“青不動”として知られる国宝「不動明王二童子像」(青蓮院門跡蔵)を研究対象にした本研究は、技法材料の多角的な検証をまとめた研究論文と想定復元模写から成る。平安時代中期に描かれた「不動明王二童子像」は、縦6.71尺×横4.9尺という大型の絹本仏画であり、周到に計画された三角形の構図をもち、卓越した線描と彩色技法によって描かれている。想定復元の根拠となる所見は、先行研究の成果を踏まえた上で、本研究のためにおこなった原本の熟覧調査に基づいたものであって、一定の信頼性が確保されている。

本研究における技法材料研究は、彩色材料の推定に留まらず、原本画の大きな特徴となっている線描表現と彩色表現について、両表現の関係性から考察した点が評価できる。さらに線描表現と支持体の絵絹との関係性にも実践的な検証と考察を進め、製糸技術の復元研究にも取り組んだことは、今後の支持体研究の進展に資するという点でも高く評価できるものである。さらに、想定復元模写の制作では、画面の大部分を占めるにも関わらず未解明となっている平安仏画の背景色についても、絵画全体の演出効果を考慮しながら暗褐色を想定するという積極的な研究姿勢で取り組み、図像部分とのバランスを取りながら空間表現として提示した。このような大型の絹本著色画の制作は、十分な専門性をもった画技と経験を要するものであり、作品制作の遂行そのものにおいても博士後期課程の課程研究として十分な評価ができ得るものである。

特に本研究の秀逸さは、色材の推定や支持体の組成などの部分的な材料研究に陥りがちであった従来の研究手法を、各技法間の関係性や技法と材料の関係性といった関係性から考察する手法へと転換させた点にある。提出された作品ならびに論文を総合的に審査した結果、文化財保存学における当該分野の研究に重要な方向性を提示した本研究を博士(文化財)の学位授与に相当する研究であると認めるに至った。